

特別編の発行にあたって

きもべつ歴史プロジェクトの会（代表 齊藤 久氏）は、喜茂別町を中心とする歴史的・地域資源を調査・研究し、まちづくりや地域づくり、歴史、文化の発展に寄与することを目的として平成 21 年に設立し、現在会員が 29 名いらっしゃいます。

主な活動として、町内外にある史跡や建造物等の視察、歴史書物の調査・研究、永く町内に生活する方への聞き取り等を行い、学習を深めています。

また、学習成果は、郷土史研究紙「ヌプリ」として発行するとともに、喜茂別町最初の入植者である阿部嘉左衛門の墓石の修復や、記念シンポジウムを開催するなど積極的な取り組みを行っています。

平成 29 年 2 月 20 日には、このような取り組みが評価され、優れた教育活動を実践している団体に贈られる、「平成 28 年度後志教育実践表彰」を受賞されました。

今回の聞き書き集は「特別編」として、平成 28 年 9 月 11 日にきもべつ歴史プロジェクトの会が主催した「喜茂別町の新たな歴史についての講演会」の内容を冊子にいたしました。

喜茂別町の歴史について学ぶ機会としてご覧いただければと存じます。

末筆になりましたが、今回の特別編の発刊にあたり、伊達郷土史研究会の太細重秋様並びにきもべつ歴史プロジェクトの会の皆様にご協力を賜りましたことにお礼申し上げます。

一講演にあたり

こんにちは。伊達郷土史研究会 (①) の太細重秋(ださいしげとき)と言います。今日は私が伊達郷土史研究会機関誌『伊達の風土』で二回に分けて寄稿しました、阿部嘉左衛門のを中心にお話をしたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

※① 伊達郷土史研究会

伊達郷土史研究会は、昭和 26 年頃に作られた「伊達史話会」という同好会が前身となっています。当時、数名の方が随時集まり、座談会や古老の話を聞く会、史跡探訪、家々の系譜、文学史談等を熱心に論じ合い、研鑽を続け、昭和 37 年に「伊達郷土史研究会」が発足しました。昭和 46 年ころより会員数が増加し、平成元年頃は 80 名を超えましたが、現在の会員数は 30 名です。

1 研究のきっかけ

私の先祖は亘理（宮城県亘理（わたり）町）の武士ですので、郷土の歴史や先祖を調べてみたくて郷土史研究会に加入し、活動を続けています。『伊達町史』『伊達市史』には町全体の歴史や行政、産業などは詳細に記されていますが、町の発展に尽力活躍した個人の歴史は余り記されていません。阿部嘉左衛門も亘理の武士で、志賀久米之進、牛坂喜四郎とともに喜茂別に移住したことだけは書いてありますが、詳しくは書かれていません。亘理からの移住者で、町史などに記されてはいませんが、是非調べてみたい人や興味を覚える方がおられます。

例えば、喜茂別町の伏田さんのご先祖の伏田満寿さんは紋鼈村 (②) が永年社という会社を設立した際に、船を造っているんですね。私の今までの調査から道立文書館の文書に明治政府

内務郷伊藤博文（後の初代初代総理大臣）に提出した造船の上申書などが所蔵されており、その文書に伏田満寿さんの名が記されているので、是非ともまとめたいと考えています。

喜茂別に移住された志賀久米之進の本家の志賀家の娘さんが嫁いだ石山家の親子は紋籠村で養蚕を広めたのです。その後、全道に養蚕の普及や事業に深く関わっていますが、町史などには僅か数行しか記されていないんです。

※② 紋籠村（もんべつむら）

1871（明治4）年に郡区編成により有珠郡が紋籠村をはじめ5村となり、1900（明治33）年に伊達村（現在の伊達市）となる。



【喜茂別町、伊達市、亶理町位置図】

こうした活躍をされた人たちを是非ともまとめてみたいと思っていた時に、喜茂別町の開祖になる阿部嘉左衛門を知りました。4年前に没後百年のシンポジウムが喜茂別町で開催され、町内の駅通（③）跡を回るバスツアーに参加させていただき、一回目の移住の際の駅通はここ、二回目はここ、三回目はここだと見学をした際に、明治4年のそんなに早い時期に駅通所が新設されたとされている事に疑問を感じました。それで、きち

んと調べてみようと思ひ、今回の機関誌への投稿になった訳なのです。

※③ 駅逓（えきてい）

駅逓は、北海道開拓使時代にできた施設で、明治から昭和初期頃の辺地の交通補助機関として、宿泊・人馬継立・郵便などの業務を行う制度。



【講演会の様子】

明治4年といひますと札幌に駅逓が出来たばかりで、紋鼈村に駅逓が開設されたのは明治16年です。そうすると明治4年2月に札幌に開設され、その秋に喜茂別に開設したとしても、荷物や逓信物をどこに運んだのかという疑問が生じます。これ

は是非とも調べてみようという資料や文献を集めました。『喜茂別町史』、あるいは今日の主催者喜茂別歴史プロジェクトの会発行の『ヌプリ』7号に阿部嘉左衛門についてかなり詳しく書かれてありますね。『バイウェイ後志』(④)では何回かに分けて詳細に書かれています。

※④ BAYWAY後志

『BYWAY (バイウェイ) 後志』は、後志地域の発信するメディアが必要という観点から、2007年1月から年2回発行され、後志地域の歴史、文化、産業など後志の魅力を紹介している地域情報誌。

私が調べた駅通関連の文献は、今日持ってきた宇川隆雄氏の『北海道駅通制の研究』、北海道道路史調査会発行の『北海道道路史』、北海道開拓記念館発行の『研究年報』などで、それから、掲載しました多くの文書は道立文書館へ足を運び解読をした文章と第一回移住者で祐筆を務めていた白石源九郎の覚書から引用しました。私が書いた『伊達の風土』の内容と喜茂別町の皆様が書かれた阿部嘉左衛門の記述が異なっていたことから、歴史プロジェクトの会の皆様から「話してもらえませんか」とお願いをされお引き受けをした次第です。皆様にお配りのレジュメは、『伊達の風土』の二回分の原稿です。私は喜茂別の歴史や地理、町の発展経緯の詳細は存じないところがあることをご理解いただきまして、お話をさせていただきます。

2 喜茂別に移住した3名とは

(1) 志賀久米之進 について

まず一つは、喜茂別に移住した3名の方ですね。喜茂別に来たのは阿部嘉左衛門と志賀久米之進・牛坂喜四郎です。阿部嘉左衛門について『喜茂別町史』などに掲載されていますので、説明は割愛させていただきます。3名の中で非常に興味を引くのは志賀久米之進です。亙理武士団が移住後、家老職は田村顕允(⑤)が有名で多くの書籍に書かれています。しかし、移住前の亙理時代はこちらに來ました志賀久米之進の本家が長年に亙って一番家老です。伊達の歴史については菅原清三先生出版の本が沢山あり、『伊達郷土史』でも1790年頃の家臣帳や、この1868(慶応4)年でも家臣の最初に名前があります。この1826(文政9)年の家臣帳でも、筆頭家老は志賀家で家禄も非常に高いです。この頃の家老職は五・六人いましたが、実は田村家は5番目か6番目で、いつも志賀家がトップですね。この筆頭家老の志賀家は仙台北藩の城下に屋敷を構え、亙理のお殿様が毎回本藩に出向くのではなく、志賀家が本藩と話し合い確認してから作業を進める重要な任務を務めていたのです。持って來ました文政9年の『家臣帳』でも、この様に志賀家が筆頭家老で、田村家は当時常盤と言う苗字でここ5番目に記されています。伊達家の屋敷に出向いたときに何番目の場所に座るのか、今で言えば簡単に言うと席順とってください。

※⑤ 田村 顕允(たむら あきまさ)

1832(天保3)年11月6日生まれ。陸奥(むつ)仙台北藩亙理(わたり)領主伊達邦成の家臣(亙理伊達家の家老)。領主とともに1870(明治3)年から北海道有珠郡へ移住・開拓をすすめ、牧畜の導入、農社の結成など、今日の伊達市の基礎を築

いた。1913（大正2）年11月20日死去。82歳。本姓は常盤。通称は新九郎。



【宮城県亶理町視察の様子】

蝦夷地有珠郡に移住することになり、田村顕允は末席の家老だったためにどうしても江戸に出向いたり、外部との交渉をしたり、蝦夷地の調査に来たりと外勤が多く、当時の社会情勢や情報を的確に入手出来たのだと思います。ところが志賀家は仙台北藩や東北の諸藩が新政府軍と戦っていた時から、本藩の意向や指示に従って動いていたんですね。第3回目にお殿様伊達邦成や阿部嘉左衛門一家も移住しますが、この頃には約千人が紋鼈村への移住を終えています。だが、亶理にはまだ何千人もの家臣団が残っていたわけですから、その人達を如何に生活させて行くかが大きな問題で、筆頭家老の志賀家は地元に残り面倒を見たんですね。ですから、移住が大幅に遅れたわけです。

数年前に喜茂別町プロジェクト会の皆さんが亙理町を訪問された際に、亙理の郷土史研究会の方々のお話を聞いて分かったのは「とにかく志賀家にはお世話になった」「志賀さん、志賀さん」と親しみを込めて話されていたと聞きました。それは、残った武士団を蝦夷地に移住をさせなければならないし、送り出す準備や段取り、亙理に残り帰農する武士団の面倒を一手に引き受けたのが志賀家の本家だったのです。この分家に当たるのが、喜茂別に来た志賀久米之進です。志賀家の分家は代々新地の城代（中世から近世の日本で大名から城郭及び周辺領土の守備を任された家臣を言う）を務める重臣で、新地は亙理の南にあり相馬の隣ですから、東北の戊辰戦では政府軍が南側から、あるいは会津方面から攻めて来た際に新地で防衛すべく戦ったために、沢山の兵士が亡くなるんですね。城も守備できず、ですから、こちらに来た志賀久米之進は辛かったでしょうし、大変苦労されたわけです。城代の要職にあるトップクラスの方が何故未開地に来たのか、その理由は分かりません。私の推測ですが本人の意思ではなく、何らかの判断があって移住したと考えますが、非常に苦労されて大変だったことは想像以上のものがあつたと考えています。

阿部嘉左衛門については他の資料文献にも書かれています。本人の意思で喜茂別に来たと言われていています。本人が何時希望したかですが、東久世通禧開拓使長官（⑥）と副島種臣参議（⑦）の本願寺道（⑧）の視察時に、伊達邦成が洞爺まで迎えに出向いたときだと言われていています。「喜茂別（この時代はシンノシケコタンと呼ばれていたあたり）に旧臣を入れて、気候調査をするように」と指示があり、その時に嘉左衛門が「私が行きます」と名乗り出たのです。何故、その時にそう言った

かです。今日持ってきましたが、移住直後の紋鼈村役所の『明治辛未四年日誌』に阿部嘉左衛門は「家従長」の役職を務めたと書いています。この当時は毎日役所に出勤していたのでは自分の土地の開墾が出来ませんから、多分2、3日ぐらいの交代で出勤していたと思います。この頃の役人は20人ぐらいで色々な役職はありますが、家従長は現在の庶務的な仕事をする長です。ですから、伊達邦成に同行し、気候調査の指示があった際には自らが重要な任務と受け止めて、家従長としての責任を果たしたと考えています。

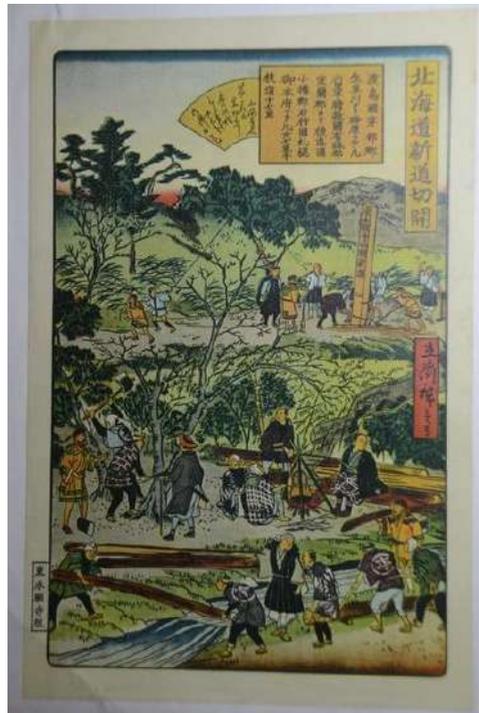
※⑥ 東久世通禧開拓使長官（ひがしくぜ みちとみ）

1833（天保4）年11月22日生まれ。1912（明治45）年1月4日死去。日本の江戸時代末期から明治時代にかけての公家、政治家。

※⑦ 副島種臣参議

（そえじま たねおみ）

1828（文政11）年生まれ。
1905（明治38）年1月31日死去。日本の江戸時代末期（幕末）から明治時代の佐賀藩士、政治家、書家。勲一等、伯爵。



【北海道新道切開絵図】

※⑧ 本願寺道路（ほんがんじどうろ）

明治初年に東本願寺が石狩国の札幌と胆振国の尾去別（おさるべつ）を山越えで結ぶ街道として建設された道路で、1871（明治4）年に開通した。「本願寺街道」、「有珠街道」ともいう。現在の国道230号の基礎となった。

（2）牛坂喜四郎 について

もう一人の牛坂喜四郎については『伊達の風土』を記述した際には、殆ど分かりませんでした。家族の名前や年令、移住した場所などは分かるのですが詳細は全く分かりません。今日、この会場に居られます札幌市の佐藤さんがこちらの喜茂別町教育委員会や亘理伊達家二十代当主の伊達元成さんに先祖のことが分からないかと問い合わせたようです。佐藤さんは私の所にも見られて先祖のことを色々と聞きしましたが、帰られてから伊達の郷土史研究家の菅原清三さんがまとめた『牛坂家の人々』や系図を送っていただき、私はびっくりしました。牛坂家は五十代桓武天皇（⑨）から発祥し、北条家の士族を務め、その後伊達家の家臣になったと記されているんですね。家臣帳などで調べてみると、嘉左衛門と序列が同等であり、亘理時代の屋敷は隣同士でした。牛坂家は移住時には伊達家の屋敷、現在の開拓記念館の前で「伊達家の門番」として移住したと伝承されているそうです。伊達邦成と東久世・副島が洞爺で会った際に嘉左衛門は自らが喜茂別に行くと言、移住が決まる際に牛坂も同意したのではと推測されます。

※9 桓武天皇（かんむてんのう）

737（天平9）年－806（延暦25）年。日本の第五十代天皇。在位781（天応元）年～806（延暦25）年。

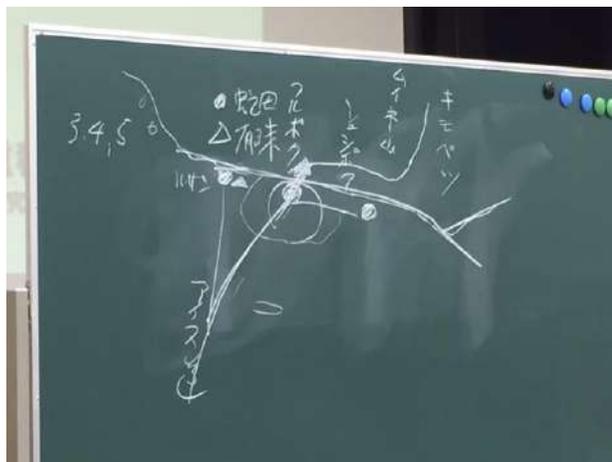
3 「シンノシケコタン」とはどこか

次に阿部嘉左衛門等が移住した「シンノシケコタン」はどこかということですね。多分皆さんも最も関心があると思いますが、どこに住まいがあったかは分かっておられる方もいると思います。伊達市でアイヌ語研究家の森美典先生は虻田・有珠アイヌは尻別川の流域で鮭漁をしていた歴史を、この『噴火湾沿岸のコタンによる尻別川と朱太川』に詳細に記述されています。私はアイヌ語については余り詳しくありませんから森先生の研究に沿って、簡単な地図を書いて説明をします。

ここが喜茂別でアイヌ語ではキモペツなどと発音、これが尻別川で、ここが喜茂別川との合流地点です。ここがルーサンで、ルサンなどの発音もありますね。ここはフルボッケまたはフルポクといい、こちら側が虻田のアイヌが、川向に有珠アイヌのコタン (10) があり、ここはシュシポクといい、虻田アイヌのコタンがありました。この三か所のコタンには洞爺からのアイヌ道があって、この道が本願寺道になったわけです。シンノシケコタンと記されるのは明治4、5年頃だけで、その後の記述はありません。森先生に伺った際に地名にコタンが付くことはなく、シンノシケだけなら真ん中とか、中央という意味があり、本願寺道では渡船場もあったのではないかとアドバイスを頂きました。私は三ヶ所のコタン、ルーサン・フルボッケ・シュシポクの真ん中を指し、ここに渡船場があったことも分かりましたので、フルボッケがシンノシケコタンだと確信をしたわけでした。ルーサンから下流にも虻田・有珠アイヌのコタンはありますから、違う説も考えられます。

※⑩ コタン

コタンはアイヌ語で集落・村落を意味し、季節的な仮の住居の場合にも用いる。一つの自然発生的コタンは、平均して5~7軒ほどといわれている。



【シンシノケコタン板書図】

4 喜茂別入植の経過

次に、東久世・副島の本願寺道視察から阿部嘉左衛門等が喜茂別に来るまでの事を、お話します。1871（明治4）年4月14日に東久世・副島は家臣20名とアイヌ3名、馬追いなど32名で開拓使を出立します。馬は20頭です。この日は定山コタン、現在の定山溪に泊まり、翌日はカシク、喜茂別の手前の山側で泊まったのですが副島参議は全く眠れなかったと記されています。東京から来たのですから、険しい山中の粗末な小屋で泊まるのですから不安で眠れなかったのでしょうか。次の日はシンシノケコタンを経由して洞爺コタンへ向かうのですが、東久世長官の書簡に「シンシノケコタンを過ぎて洞爺への道は三才の子供でも歩けると言って笑った」と『喜茂別町史』に記載されていますので、ある程度整備された道があったと思います。そして、4月17日に紋鼈村を視察して室蘭に向かい泊まります。

次に、先ほどの『明治辛未四年日誌』や開拓使の史料などから阿部・牛坂・志賀の3戸とアイヌ3戸が喜茂別に来るまで

の動向を話します。喜茂別への派遣が決定したのは8月下旬で、9月8日に田村顕允と小熊懐定（亙理の会計役）、その家臣等が開拓使と協議のために紋鼈村を出発、シンノシケコタンに泊まります。日誌には空小屋があってそこに泊まりますが、紋鼈村からの道は三才の子供でも歩ける程ですから、本願寺道の工事中はここに作業員の宿泊小屋や資材置場が沢山作られていたと思うんですよ。紋鼈村から50戸、あと和田村からも数十戸が関わったとありますから、私は家族も一緒だと思います。明治4年の第3回移住者は140戸ですが、実は屋敷割図には90戸ぐらいしか記されてなく、50戸はありません。ですから、この中の何戸かは本願寺道工事に伴って、そのまま同行したのではないかと考えています。多分、シンノシケコタンに住まいがあれば工事の人達の炊事が必要なわけで、女性もそこで協力をしたのではないかと推測をしています。田村・小熊はここに木標を建ててから4里程行くと工事中で、そこから峠に向かうが道がなくなり前に進めなく、定山コタンに到着できず山中に泊まります。札幌に着いたのは、9月13日ですが札幌神社のお祭りで開拓使役人は休暇で会うことが出来なかったのです。9月15日、西村監査官の所で気象調査の正式な依頼を受けるんですね。この時に阿部・牛坂・志賀の3戸とアイヌ3戸の扶助米金317両2分1朱（現在の貨幣価値で約800万円）と、別途に差し当たりの銭として359文と相当高額のお金を貰いますが、その理由は後でお話しをしたいと思います。次に、9月26日に阿部家・牛坂家が紋鼈村を出発、志賀家は28日に離れました。これは旧暦の日付ですから今の暦より一ヶ月ぐらい遅れた日にちになります。10月頃には本願寺道が開通しますが、明治6年に札幌新道が開通しましたので、事実

上の廃道になっていくわけです。この当たりの史実は『喜茂別町史』『ヌプリ』などに記されています。



【当時の亙理藩の住宅地図】

5 阿部嘉左衛門が担った「駅伝」「駅遞」とは

次に、嘉左衛門が担った「駅伝」「駅遞」とは何かをお話させていただきます。

喜茂別の関係者がまとめた内容には駅遞と駅伝が混同している可能性があります。駅遞を一番分かりやすく理解するには、1878（明治11）年にイザベラ・バード (11) が日高から噴火灣を旅した記録が参考になると思います。歴史的には江戸時代の「会所 (12)」が駅遞に変わりますが、要するに駅遞に泊まって馬を借り、次の駅遞に泊まり、そして馬を借りて前へ進んで行くのが駅遞を利用した旅の姿です。当時、比較的早く開けていた紋鼈村でも1883（明治16）年1月ようやく駅

逦が開設されます。喜茂別に駅逦が出来、嘉左衛門が駅逦を行っていたとすると、何故そんなに早いのかの疑問が出て来ます。そこで、喜茂別駅逦について道立文書館所蔵の文書を探したんですね。明治42年に発行された『室蘭大観』という本に嘉左衛門は「駅伝」を行ったとありますが、これを「駅逦」と書き換えています。この記述を裏付ける記述は見つかりませんね。最初にお話ししましたこの宇川隆雄氏の『北海道駅逦制の研究』の中に、公用状などを専門に運んだ人を『開拓使専用人足』という言葉で説明をしています。先ほど紹介しました『北海道道路史』や『研究年報』の中でも、喜茂別の駅逦は明治24年6月とあり、明治4年に新設されたとは記述されていません。喜茂別の方は明治4年に嘉左衛門が駅逦を行ったと書いていますが、その史実はないと思います。また、嘉左衛門が担った当時の駅逦所規定や喜茂別駅逦所の詳しい内容については割愛させていただきます。



【室蘭大観】

※⑪ イザベラ・バード

1831年10月15日生まれ。1904年10月7日死去。

19世紀の大英帝国の旅行家、探検家、紀行作家、写真家、ナチュラリストで、インドのジャンムー・カシミール州シュリーナガルにジョン・ビショップ記念病院を設立し、女性として最初に英国地理学会特別会員に選出された。

1878（明治 11）年 6 月から 9 月にかけて東京から北海道（蝦夷地）までの旅行の記録『日本奥地紀行』を執筆した。

※⑫ 会所

近世の蝦夷地では、アイヌとの交易場所で「場所請負制」を行い、その拠点に運上屋や番所、休泊所などを整備して政治的支配を次第に高めていった。蝦夷地が幕府直轄時に、運上屋を「会所」に改称、行政的機能などを増大して整備された。

駅逓設置については、阿部嘉左衛門は亶理から来たお侍さん、それも上位ですから直接かかわったのではなく、扶助米金を受けて喜茂別に来たアイヌの人達が行ったと考えています。全部ではないと推測されますが、アイヌの人が定山コタンまで繋ぎ、扶助米金の支給や天候の良い時などは阿部嘉左衛門も定山コタンまで行ったのではないのでしょうか。

喜茂別から紋鼈村までは牛坂も手伝った、というのが私の推測です。先ほどイザベラ・バードのお話をしましたが、有珠駅逓の場合、駅逓取扱人は白鳥という和人ですが、実際に運ぶのはアイヌの人です。これはどこの駅逓でも同じで、阿部嘉左衛門は取扱人で、実際に運んだのはアイヌの人達ではないか、そのために扶助米金が出たというのが私の考えです。

先ほども説明しましたが、阿部嘉左衛門が紋鼈村に移住したのは明治 4 年です。移住者が乗船したのはアメリカ製の船で、これは石川藩が購入して明治政府に差し出した船です。しかし、家具や農具、あるいはその年に播く種子類などは和船二艘で運んだのです。143 戸、780 余名の移住者で開墾を行えば、

問題はなかったのでしょうか。ところが、アメリカ製の船は着いたのですが、道具や種子、家財道具などを積んだ和船が難破して大変なことになりました。

この歴史は『伊達町史』などに記されていて、当時は食べ物はほとんどなく、フキばかり食べるのでアイヌの人達は「お尻の穴までフキになったのではないか」と笑ったと書いてあるんですね。そのくらい食べ物が無かったのですが、阿部嘉左衛門等は開拓使の扶助米金が出ていたのです。この扶助米金というのが結構良いんですね。扶助米は15歳以上が玄米5合、7歳から14歳は4合、6歳は3合と子どもさんに手厚く感心します。それから塩・味噌は一日銀5分、小屋を建てる際は5両ぐらい、その他にも農具、クワ、むしろとかも出ていますし、種子や鍋・釜・茶碗なども扶助されました。ところが紋鼈村の人達は食べ物や畑を耕す農具もなく、当分の間は収穫も出来ないわけですから第一回、二回目に移住していた方々から寝る時に農具を借りて畑を耕すなど大変苦労したわけです。最終的にはその年の暮れに伊達邦成は開拓使にお願いをして米とお金を借り、やっと凌いだのです。

ところが明治5年、今度は開拓使の貫属（所管に従事すること）にされるのです。今までは互理伊達家が明治政府から貰った土地ですから、自分の土地として耕したのに貫属になると、つまり開拓使の家来と言うことになったのです。貫属になったら生活が大変だと考えたのですが、開拓使は扶助米金を出すことになり15歳以上は7合5勺、7歳までは5合、6才は3合、その他に塩・味噌も出ています。ですから、貫属、要するに開拓使の家来になることで紋鼈村の人達も反発したわけですが、扶助米金を貰うことで生活が少しは楽になったと思います。



【きもべつ歴史プロジェクトの活動の様子】

6 阿部嘉左衛門の自宅火災で分かったこと

次に、阿部嘉左衛門の住居についてですが『喜茂別町史』などには全く書かれていませんでした。

今回、道立文書館所蔵文書から梁間 2.5 間、桁 6 間の 15 坪の草小屋で、東隣に志賀家、西隣に牛坂家が住まいを構えていたことが分かりました。15 坪の家の構造を紋鼈村の移住当時の住居から推測してみますと、間仕切りされて板の間に囲炉裏を作り、土間には流しがあって作業場でもありました。草小屋ですから、当時は萱やヨシですよ。紋鼈村もそうですけれども、これをいくら厚く重ねても喜茂別では大変ですよ。そのため、私は壁が土壁であったと推測をしています。何故、そう思ったのかと言いますと『喜茂別町史』に、伊達市の荒川さん宅から出て来た 4 通の文書がありますが、その中に「今般建築

方御用ニ付御買入相成度同掛より申越候間至急差出候...。」、
以下は略しますが、何を要求したかと言いますと「楯皮」、こ
の意味が分からなく最初は一つの言葉と考えていましたが、大
正2年発行の『字源』という辞典で調べるうちに別々の文字じ
ゃないかと思ったのです。この「皮」は熊皮やキツネの皮で床
に敷いたのではないか、アイヌの方も敷いていたんですね。辞
典では「楯」は「こまい」とあり、土壁に使う材料だと分かり
ました。あくまでも私の推測ですが、この楯に土を塗って土壁
にし、そこに萱やヨシを立てたんじゃないでしょうか。昔の家
は竹やヨシで作られ、そこを麻ひもなどで縛り、そこに土を塗
っていました。私の昔の家や納屋でも使われていましたし、喜
茂別でも行われていたと思います。亘理時代に楯は使われてい
たので喜茂別でも使ったと考えられます。

7 三名の喜茂別移住での役割とは

3名の役割は何だったのかをお話します。まず、本願寺道の
視察に来た副島種臣は佐賀藩士です。佐賀藩というのは幕府軍
と戦った「薩長土肥」の四藩、薩摩・長州・土佐・肥前の一つ
が肥前藩で、佐賀藩とか、藩主名から鍋島藩とも呼ばれていま
す。藩主は鍋島直正で、開拓使の初代長官です。鍋島藩は最強
の軍事力を有し、奥州・箱館戦争でも多くの兵力を投入して勝
利に貢献したので、開拓使判官島義勇など鍋島藩の兵士が開拓
使役人を務め、藩主の影響を強く受けたのです。副島参議もそ
の一人であり、鍋島藩一番の出世頭で本願寺道視察の翌年には
外務大臣に就任するのです。副島参議は、伊達邦成が仙台藩一
門の筆頭ですから賊軍の重要な人物で、敗戦時は本藩を潰すわ
けにはいかないので厳しい罰に当たる人物だと考えていたと思
います。伊達邦成も公家出身東久世長官よりは、強力な権限を

有していた新政府軍の立役者副島参議に誠心誠意北海道の開拓に努めますと平身低頭で挨拶をしたと思っています。レジュメに書きましたが、伊達邦成の意向で重臣三戸による気候試験は指示ではなく命令と受け止めざるを得ず、相当の覚悟と秘策を秘めて速やかに実施したのではないのでしょうか。

では何故、喜茂別での気候調査が必要だったのかを考えてみます。開拓使はケプロン (13) を招聘し、土木技師ワーフィールド (14) は室蘭から有珠・虻田を經由して喜茂別、そして中山峠を経て札幌に至る本願寺道をベースにした幹線道の建設を提唱しました。そのためムロラン、現在の崎守には人足が集められて建設資材が陸揚げされ、宿泊の小屋も建設されたとの記録があります。この幹線

道建設の事前調査の一つが、気候調査だと思いません。しかし、本願寺道は駄馬道ですし山間溪谷が厳しく、結果、苫小牧經由で国策国防上の重要道として「札幌新道」が開通したわけです。伊達邦成にしても札幌と噴火湾を結ぶ中間地の喜茂別で気候試験や地勢調査などを実施すれば将来、自費移住や開拓使の支援があれば開墾ができ、多くの家臣団が移住可能になる拠点と考えたのではない



【アコーディオンを奏でる阿部嘉左衛門】

でしょうか。『喜茂別町史』に副島参議が「成程千年の都府と大感服」とありますが、本願寺道の開削途中の僅かな通過時間だけで喜茂別や羊蹄山麓一帯は広大で肥沃な未開地だと魅了され、是非とも亙理伊達家の主従に調査をさせるべく指示をしたと思います。開拓使文書にもありますが、シンノシケコタンには追々新道を開通させて5、60戸に増やしたい、などと岩村大判官に上申をしていますね。それだけ喜茂別一帯は将来性のある魅力的な土地であったわけで、開拓使としても是が非でも気候調査をさせたかったと推測をしています。

※⑬ ホーレス・ケプロン

1804年8月31日生まれ。1885年2月22日死去。

アメリカ合衆国の軍人、政治家。日本では積極的に北海道の視察を行い、多くの事業を推進した。札幌農学校開学までのお膳立てをしたのもケプロンである。また、1872（明治45）年、開拓使東京事務所で、ケプロン用の食事にライスカレー（当時の表記はタイスカリイ）が提供されていることが分かっており、これはライスカレーという単語が使われた最初期の例である。

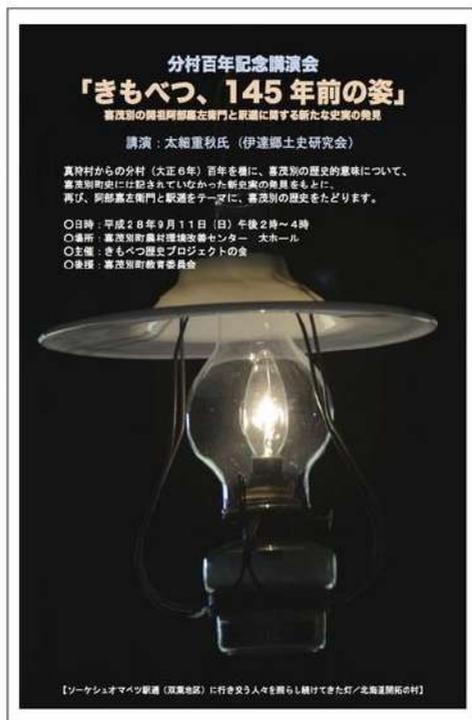
※⑭ ワーフィールド

1871（明治4）年開拓使顧問ケプロンとともに来日。函館-札幌間の測量をおこない、ケプロン報文のもととなった報告書を書いた。また札幌を開拓の中心地とすることを進言した。

簡単なまとめになりますが、昔は虻田・有珠のアイヌが尻別川で鮭漁のために通いコタンを作り、アイヌ道が出来ました。

その道を松浦武四郎が踏査探査して本願寺道の開削に結びつき、この道を東久世長官・副島参議が検分に訪れて伊達邦成に指示した気候調査によって多くの関係文書類が残されました。その資料を紐解いて見ると喜茂別町の歴史にスポットが当たり、史実解明の手掛かりや判明のお手伝いができれば嬉しく、これからも調査を継続して行きたいと思えます。

本日は、ありがとうございました。



【「分村百年記念講演会」ポスター】

この講演記録は、平成28年9月11日に行われた「分村百年記念講演会」（きもべつ歴史プロジェクトの会主催／喜茂別町教育委員会後援）における、太細重秋氏（伊達郷土史研究会）のお話を、まとめたものです。



新町章

《平成 28 年 10 月 12 日制定》

喜茂別町は大正 6 年に真狩村から分村し、平成 28 年に開町 100 年を迎えました。

喜茂別町の人々が未来に夢と希望をつなぎ、新たなまちづくりの創造に邁進することを願い、開町 100 年を出発点として新町章を制定いたしました。

喜茂別町は新町章のコンセプトとして、北海道の主要幹線国道 230 号と国道 276 号が交差する立地条件にあり、喜茂別町を起点として北海道をつないでいくことをイメージしました。